



「和解の務め」音信

Ministry of Reconciliation in South Africa

(21-1)

Jan. 2021

金煥・朴貞玉

「神は、キリストによって私たちをご自分と和解させ、また、和解の務めを私たちに与えてくださいました」(Ⅱコリント 5:18)

二〇二一年、新しい年となりました。三位一体の神の祝福の中でこの一年、益々清栄であることをお祈りいたします。昨年一年間、皆様のお祈りのお陰様で主の守りの下で一つひとつ「和解の務め」が進められてまいりました。ステレンボッシュからポチエフストロムへの移転、ロックダウンの中のミッシェンハウズ購入、何よりも大きな進展である宣教農場の獲得などがありました。

1. 一つの証し

今回、小生の一つの証しをさせていただきますので寛大にお許しください。高校3年生の時、当時出席していた教会に特別集会有りましたが、その時、共同体のビジョンが心にとえられました。同じ教会に障害者の親友が居まして、そのような障害者と一緒に生活ができる共同体を目指すことになったのです。その時以来、そのビジョンを巡って探索と研究を続けてまいりました。その間、数えきれないほど色々な共同体を訪問して、

みました。祈りの家、カトリックの修道院、プロテスタントの修道院、マザーテレサの愛の家、アナバプテリストのブルドホップ、ハンセン病患者者の集団部落、モラビアン人のミッシェン・ステーション、キブツ、自給自足の農村共同体など、数多くの共同体を自発的に、楽しく訪ねてみました。そのビジョンは、始めは単なる理想主義的なものですが、段々と現実的な、宣教的なものへと変化を成し遂げました。今、一番良いモデルとして目指すのはモラビアン人のヘルンフット (Herrnhut) です。

2. ヨセフの夢

皆様もご存知のように、旧約聖書のヨセフは青少年の時、夢を見て、色々な経験と試練の後、約23年を経てからその夢の現を見ることができました。彼が見た夢は単なる心理的な、或いは生理学的なものではなく、神からの預言的な、啓示的なものでした。小生は夢のような願望を心に抱き、それに向かって積極的な努力すれば何時か実現するという、一時流行した、

積極的思考主義者ではありません。ところが、昨年、共同体へのビジョンが現実化への第一歩を踏み出すことになりました。在米のある教会が去年設立40周年記念として小生たちの働き場に教会堂を一つ立ててくれるという約束をしてくれました。小生はそれを共同体の基盤となる農場への変更を申し入れ、快く受け入れてもらいました。その後、約一年かけての物色と交渉の後、一つの小さな農場を購入することができました。共同体のビジョンが与えられてから実に50年ぶりの出来事でした。今、正直言いますと、不安と恐れでいっぱいです。これからどうすればいいのか、それをどう経営すればいいのかと。小生のこのビジョンを敢えてヨセフの夢にオーバラップさせるのは、到底無理と思うのですが、もしもそれが神からのものだったならば、時間は経ても必ず実現すると信じます。始める者の不安を乗り越え、困難があっても開拓の喜びに与かりたいと思う次第です。これは皆様の背後の執成しがあつてこそ出来たことであり、続けての関心とお祈りを心よりお願いいたします。

3. 祈祷課題

今までのお祈りに心より感謝いたします。そして、与えられた農場を主の御心に沿って宣教共同体の基盤とすることができるよう、必要な人的、財政的、霊的な資源が適切に与えられるようにお祈りしてください。宣教同労者の皆様に主の平安をお祈りします。



宣教農場